平成３０年度　地域でつながる家庭教育応援事業

県北地区フォローアップ研修

（自己肯定感を育むために）

日　　時：平成３０年１０月２９日（月）１４：００～１６：４０
場　　所：福島県青少年会館

【研修の趣旨】

社会情勢の様々な変化により、人と人とのつながりや豊かな体験など、子どもたちの成長に必要な要素が十分に体得できなくなってきている現状がある。それに伴い、いじめや不登校などの問題が顕在化し、子どもたちの自己肯定感の形成に及ぼす影響が懸念されている。そこで、明石氏の社会教育学の視点からの講話を通して、子どもたちの自己肯定感を高めるための取組を家庭や地域で行っていけるように、本テーマを設定し、当研修を実践した。

1　講演「自己肯定感を育むために」～今の子どもたちに必要なこと～

講師　　千葉敬愛短期大学　学長　明石　要一　氏

（国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター長）

（1）頭の体操ー時代を読み解く

①　親戚が減ってきた。ナナメの関係をどのようにして構築していくか。
⇒子どもたちは、縦の関係(学校)と横の関係(家庭)、そしてナナメの関係(いとこ、親以外の大人)との関わりの中で成長してきた。特にナナメの関係が充実していた。親戚がたくさんいて、いとこが競争相手になったり、よい相談相手になったりしていた。また、地域にはこわいおじさんがいて、子どもたちとつながっていた。ピンポンダッシュが可能だったのも、地域とのナナメの関係があったからである。しかし、近年はいとこの数も減り、ボーイスカウトやガールスカウトへの加入率も減少するなど、ナナメの関係が築きにくくなっている。そこで、放課後支援や学校支援活動などを通して、地域社会でナナメの関係を形成していくことが求められる。

②　団塊の世代で孫をもたない人は、どのくらいか。
⇒団塊の世代で孫をもたない人の割合は４人に１人にのぼる。自分の孫がいないことが、教育に関心をもたない要因のひとつになっている。多くの人たちに、これからの教育に関心をもってもらうためにも、社会に開かれた教育課程の推進が大切になる。

③　保育所設置では住民の反対が起きる。小中学校の統廃合では反対が起こる。この違いは何か。
⇒小中学校では、運動会や文化祭などを通し、地域に開かれた教育活動が展開されている。だから、地域住民も地元の小中学校に愛着をもつ。しかし、保育所のお遊戯会や運動会などを、地域に開いている例は少ない。保育所の中身が分かると住民は反対しない。

④　保育所卒と幼稚園卒の子どもで１年生の４月中、保育所卒の方が不適応を起こすと言われる。それは何故か。
⇒保育園には昼寝の時間があるなど、生活リズムの違いがある。小学校に入学し、急激に生活習慣が変わるので、対応しにくくなることが不適応の要因の１つとして考えられる。

入学したばかりの子どもに対する配慮を、小学校でも検討する必要があるのではないか。

⑤　品川区の小学校では、学区の自由化を決めた。親たちは何を基準にして学校を選択するか。
⇒保護者が子どもの学校を決める際に、若い親ほど「ホームページ」や「口コミ」を判断材料にしている。学校での子どもたちの様子を毎日ホームページに掲載して、家でいつでも見られるようにするなど、地域の学校を活性化させるためにも広報の工夫が大切になってくる。

⑥　ＡＩの「東大ロボコン」の偏差値は５７である。千葉大学教育学部は合格する。では、何故ＡＩでの東大合格をあきらめたか。
⇒言葉の力は本をたくさん読むことで育まれていく。また、遊びを通した体験をしないと、言葉は増えていかない。しかし、ＡＩは、文章を読むことができないし、遊びを通した体験もない。だから、東大合格をあきらめたと言われている。しかし、今、文章を読むことができない子どもが増えている。LINE や SNS などが言語を習得する手段になってきており、人と人との直接のやりとりが少なくなっている。昔の口げんかは、「お前の母さんデベソ」など長い言葉で言い合っていたが、今の子どもたちは「バカ」「デブ」などの短い言葉しか使えない。言語能力を育んでいくためにも、読書や遊びの体験が必要になっていく。

⑦　１０年後、今ある仕事の半数近くはなくなる、と言われる。残る職業は何か。
⇒これからＡＩの技術が益々進歩していく。現在人間が行っている仕事をＡＩが担うようになり、今ある仕事の半数近くはなくなると言われている。教科指導も AI が行うことが可能になっていくであろう。
　しかし、いじめ問題や不登校などの対応や集団行動の指導、幼児に対する教育などは人間でないとできない。予測不能な事柄には AI は対応できないからである。

⑧　「判断力」と「決断力」はどこが違うか。「判断力」と「決断力」はどこで育つか。
⇒判断力は、認知能力であり、学校教育の中で育成できる。それに対して、決断力はＡかＢかＣかを自分で決める力であり、教育で身につけさせることができない非認知能力である。分かりやすく言えば、恋愛は判断力で、結婚は決断力である。日本の子どもたちは判断力は育っているが、決断する力が弱いと言われる。それは、日々決断を迫られている海外の子どもたちに比べて、決断をさせる場面が減っているからである。子どもたちの決断力を育むために、自分でボタンを押す経験をさせていくことが必要になる。

⑨　福井県は秋田県に負けず、学力が高い。この１０年だけでなく、以前から高かった。それは何故か。
⇒３世代世帯の割合が高い。全国でも有数の健康県である。また、図書館入館者数が多く、子供会等の地域力も充実しているなど、様々な要因が子どもたちの学力に結びついていると思われる。

⑩　長崎からヒラメを築地に運ぶとほぼ２割近くが死ぬと言われる。そこに穴子を加えると、死ぬ率が５％ほどになる、と言われる。何故か。
⇒穴子が加わったことにより、ヒラメに良い緊張感が生じるからである。組織や集団がたくましくなったり、成長したりするためには、異質な存在があった方が良い。集団生活において、様々な性格や個性をもった仲間がいることは組織をよくするための条件になっていく。

⑪　幼児の遊びでこの１０年間「ごっこ遊び」が消え、「配膳遊び」が増えた。
⇒幼児の遊びが変化しているのは、親の働き方が変わり、食事を作る親の姿を、日常的に見ていない子どもが増えていることが要因の一つである。親が食事を作る姿を見せたり、子どもと一緒に作ったりすることが重要になる。「食育」も含めて、一家団欒などを大切にしていきたい。

⑫　遊びほうけて「夕飯時に箸を持ったまま眠った」経験があるか。
⇒今の子どもたちは遊びほうけていない。１日平均の歩数が、昔の子どもは２万２千歩だったが、今の子どもたちは、９０００歩まで減少

しているというデータがある。安心して外遊びができる環境もなくなってきたり、室内でのゲームの普及が進んだりしたことにより、体を動かす機会が減り、子どもたちの体力が低下している。また、地方では、学校の統廃合が進み、バスでの通学になるなど、歩く機会が減少している。道草をする経験もなくなっている。外での遊びを通して、得るものは多いので、日常生活において、意図的に外で体を動かす機会を与えることが大切である。

⑬　「肉食女・草食男」が小学校から出現した。肉食男を育てる方策を考える。
⇒男性に元気が足りない社会になってきている。反面、女性は元気である。小学生の様子を見ていると、女子児童はすぐに集団生活に馴染んでいくのに比べ、グループに入ることができずに一人でいたり、親友を作れなくて友人関係がふわふわしていたりする男子児童が増えている。グループや集団の中で、段取りをしたり、メンバーをひっぱっていったりする、小さなおせっかいの体験をさせる機会を意図的に作っていくことが求められる。

⑭　進学校の高校１年生の体験量と学業成績に「差」は見られない。「差」が見られるのは教育困難校に進んだ高校１年生である。彼らは１５歳までに「体験ロス」をしている。
⇒保護者の経済力や教育に対する考え方で体験の格差が生まれてくる。体験の力は大きく、豊かな体験が自尊感情を育んでいく。

（２）体験格差はなぜ生まれるか

①読む力と書く力は違う。
⇒（犬や桜など）１文字の動物と花の漢字を何個書くことができるか比べると、花より動物の漢字の方が多く書くことができる。その理由は体験量の違いがあるからである。子どもたちは、花より動物の絵本や図鑑を好む傾向があるし、植物園より動物園の方が人気がある。そのように、小さいころから、花と比べて動物に関する体験の方が多いので、動物の漢字の方をより多く書くことができる。もう一つの理由は、動くものは記憶に残るからである。記憶に残ったものは書いて表すことができる。だから、実際に動いて体験することは書く力を高める上で大切になってくる。書く力が身につくと、自信がつく。そして、その自信は自己肯定感の基礎、基本になっていく。

（３）家庭教育の役割

①晩酌文化のすすめ・・・一家団欒の宴をする
⇒一家団欒で宴を行う機会を増やしてほしい。様々な年齢が集う一家団欒の時間は、人間関係の勉強をする大切な時間である。これは、社会に出てから活かされる経験になっていく。その体験が少なくなっているから、上司等との接し方が分からず不都合を起こす若者が多くなっている。

②給料の伝達式を行う・・・お金の回り方を学ぶ
⇒給料の明細書を子どもにも見せてほしい。税金が記載している明細を見せることで、子どもたちがお金の回り方を学ぶ機会になる。親が働いているから、自分たちが生活できているという、親への尊敬と感謝の念をもたせることは大切なことである。

③「へその緒」の伝達式を行う・・・親の責任は何歳までか
⇒結婚するときにへその緒を渡すことがあるが、これは親と子の縁を切る儀式である。責任感を高めるために成人式の際に実践してほしい。

（４）子どもを伸ばす親の一言

①　子どもの「いいところ」を１０個以上言える親になってほしい。子どもの自尊感情を育てるには、具体的な言葉で具体的な行動を見てほめることが大切である。成長してくると褒めにくくなることもあるが、その時には、過去のビデオや写真を見て成長したことに気づいてほしい。

② 自ら考える機会を与える教育をしてほしい。「クローズ・エンド（結果を与える）」でなく、「オープン・エンド（結果を与えない）」機会を増やして、ヒントを与えるような仕掛けをすることで子どもは伸びていく。

③「生まれてきて良かった」と子どもが感じることで自尊感情が高められる。これは、自己肯定感を高める上で、一番大切なことなので、機会を見つけて繰り返し言葉かけをしてほしい。成長してきて、直接伝えにくいときには、連絡帳やメールなどを活用することも方法の一つである。

④ 誰かと比較する相対評価をされると、言われた子どもは覚えている。特に兄弟で比べるような評価はしてはいけない。子どもをほめるときには、絶対評価で「あなたが一番」というメッセージを伝えることが大切である。

⑤ 子どもの話を聞ける親になってほしい。「話し上手」より「聞き上手」になることを意識してほしい。まず話をよく聞いて、子どもの気持ちを受け止めることで、子どもたちの心の安定が生まれる。

⑥ 「失敗は成功のもと」を信条にする。「七転び八起き」「人生万事が塞翁が馬」「捲土重来」「石の上にも三年」「苦あれば楽あり」の気持ちで育て、落ち込んだときには何か一つ励ましの言葉を伝えたい。その励ましの言葉が子どもたちの心に残り、つまずいても、自分で起き上がれる大人に育っていく。

2 グループ協議

講演を受けて、「自己肯定感の形成」のために、親や教師、地域の大人ができることを話し合った。それぞれのグループで、活発な意見交換がなされた。

【話し合われた内容や意見】

＜グループ協議から＞

- 子どもの良さを見つけて、小さなことでもほめる。
- 子どもたちは信号を送っているので、その信号を受け取る。
- 保護者と一緒にやる活動を増やす。多くの体験をさせる。
- ２０年前にこの話を聞いていたら…うまくいかないのが子育て。
- 企画に集まってくる子どもが苦痛ではいけない。
- 失敗から学ぶこともたくさんあるのに、こうなればいいなという姿に大人が導いている気がする。
- 小さいときの愛情は大切。つまずいたときに振り返るとそこに返る。
- 愛情は自立につながる。…等

【研修を終えて】

○ 参加者同士の話し合いを交えた明石氏の講演を通して、子どもたちの自己肯定感を高めるために必要なことを参加者全員で共有することができた。

○ 幼・小・中の保護者や教職員、家庭教育支援に関わる方、社会教育行政関係者、家庭教育応援企業担当者など様々な立場の人が集まり、講演を聞いたりグループ協議を行ったりすることができた。社会全体で子どもたちの自己肯定感を形成していくことの重要性を改めて認識することができた。

○ 参加者同士の話し合いも交えた講演だったので、自分たちで考えをもって講演を聞く姿が見られた。当事者意識をもって、講演を聞くことにより、子どもたちのために家庭や社会でできることをより深く考えることができた。

○ グループ協議の話し合いの視点をより明確にして協議を行う必要があった。講演内容を具現化するために、それぞれの立場でできることを話し合っていけるよう議題設定などを再度検討し、より充実した研修になるように改善を図っていく。